

一九七七年十二月一日第三種郵便物認可

発行所〓社会通信社

発行人〓滝野 忠

e-mail: shakatsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポラック谷九〇四

電話(03)33377146 49

FAX(03)32991536 7

振替〓〇〇一〇〇一九一五八四三一

労働〓中央労働本店No.1154163

購読料〓月額700円 6カ月前納制

## 〈もくじ〉

### ■巻頭言■

原子力・軍事マフィアに勝つ道

自治体議員づくりと共同戦線

原野人……2

労働者階級は八〇%超なのに……

―第四六回総選挙結果から―

4

「チエルノブイリ視察」から日本が見えた

―脱原発 子ども達の未来をともし灯り―

照井 モト……5

私のなかの

釜鶴松〓渡嘉敷良子〓に出会うために

毛利 孝雄……10

もつと幅広く織、ゼッケンをもつて

―運動の広がりと推進派の虚言―

渋谷 澄夫……15

「中間層」という虚構

―現代労働情勢と運動の課題(中)―

滝野 忠……16

読者からのおたより……18

編集部だより……14

# 刊社会通信

NO. 1135

二〇一三年一月一日号

二〇一三年一月一日発行  
(毎月一日・一五二回発行)

## 原子力・軍事マフィアに勝つ道

自治体議員づくりと共同戦線

脱原発の叫びは大きくなった。

独占資本はこれをどのように避けるかで、腐心する。

関電大飯原発は無理にも稼働させ続けて、多くの再稼働につなげたい。

### 規制委員会の現地調査とマフィアの魂胆

大飯原発の下には活断層があると指摘されており、原子力規制委員会は看過するわけにいかなくなつた。四人の専門家を選定して昨年一月に現地調査を実施した。

日本原電敦賀原発の敷地内も、別に四人の専門家チームによる現地調査を二月初めに実施した。どちらの調査団にもその上に嶋崎邦彦規制委員長代理が座る。

大飯三、四号機の緊急用取水路等の下には「F―六断層」が横切っている。四人は試掘溝を調査して、「一二万―一二万年前以降」の地表のずれであることは否定できないとの認識で全員が一致した。一人は関電の主張のように地すべりの可能性もあるとしたが、その人も活断層である可能性を否定できなかった。メンバーの一人、渡辺満久東洋大教授（変動地形学）によれば「シロ、クロ、グレーで例えれば、私がクロで、一人が濃いグレー、二人がグレーだった。当然運転停止になるものだと思うていた」。

『耐震安全性に関する安全審査の手引き』によれば、活断層の疑いがある場合、安全性優先の原則から活断層とみなし、その真上に重要な施設は想定していない。造ってはならないものであり、即刻停止しなければならないはずだ。ところが規制委員会も政府も経産相も停止させなかった。規制委は追加調査をするからと、先延ばしした。原子炉直下には「F―六断層」につながっているらしい何本もの断層もある。これらも活断層の可能性が大きい。しかし詳しい調査は、稼働したままでは実施できない。

他方で敦賀原発については、敷地内を走る「浦底断層」が「大変活動的」であると判定され、これに連なる未知の活断層が建屋の下を走っている可能性も指摘された。

NHKなどのマスコミは、「敷地を活断層が走る唯一の原発である敦賀原発」と異様な虚偽の形容詞を付けてこの調査を報じた。

中小の事故続きで、補修にも費用がかさみ稼働にさほどの魅力のない敦賀原発は、この際廃炉にして、規制委員会がいかに公正であるかを装いながら、他の原発の再稼働につなげようというのがマフィアの魂胆であろう。他の若干の炉も生けにえに加えず、薩摩川内から北海道泊にいたるまで、どこも原発の敷地内にも活断層の疑いのある大小の断層が横たわり、近くにある海底や陸地の大活断層と連動する恐れがある。

原子炉やタービンや重要設備の土台に断層滑りや地割れが生じたら、どんな耐震設計も無意味となる。冷却材喪失・メルトダウン・水素爆発や、制御棒挿入不能・核暴走・爆発の起る危険性が大きいのだ。全ての原発は停止して廃炉とするほかはない。

かつて社会党で脱原発運動を担ったのは自治体議員による原対協だった。一昨年来の自治体議員の活動も目覚ましい。議員候補の増加拡充による運動の強化が望まれる。

### 「身を切る改革」と民主主義先進国

投票日直前にこれを書いている。政党がどのように再編され、やがてどのような政府がつくられようとも、原子力マフィアは当面安泰になりそうである。軍事マフィアはさらに幅を利かせて悪計を進めそうである。戦争をする国へと憲法改悪をはかる。そのためには「身を切る改革」の名のもとに議員定数を削減しようとする。

民主主義先進国を見よう。イギリスでは日本の半数の人口（六〇二七万人）で下院定数は六五〇人だ。人口百万人当たり一一人だ。わが衆議院の四八〇人（人口百万人当たりたった四人）ではあまりにも過少であり、一三〇〇人に増やすべきなのだ。

フランスの人口は六四一〇万人で下院定数は五七七人（百万人当たり九人）であり、仏並みだと日本は一〇八〇人にすべきである。ドイツの人口は八二四二万人で下院定数は六二〇人（人口一人当たり七・五人）であり、独並みだと日本の定数は九〇〇人にしくはなくてはならない。つまり四八〇人は少なくとも倍増すべきなのである。

定数削減の独占資本の魂胆は明白である。労働者を始めとする市民にとっては、国会議員報酬の大幅削減と政党助成金の廃止とともに、定数を増やすことこそが必要である。それ以上に必要なのは、あきれるほどの死票として多数の民意が排除されてしまう選挙制度の改正だ。少なくとも小選挙区制度の即時廃止こそは不可欠である。

### 急を要する共同戦線と自治体議員づくり

「日本維新の会」がいかなるもので、どんなことになるかは、これまでの滝野論文を読めば明らかだ。岩手の御仁による「日本未来の党」にも、未来はありそうにない。

にわか仕立ての党に期待させたり、落胆させたりなどを繰返してはならない。革新政党（左派政党）がバラバラのままでよいはずがない。独善を捨て相手を尊重しながら、共同によって市民の心をつかめば、共産党も社民党ももっと伸びるはずだ。社、共が共同しないまま、ナチスの台頭を許してしまった歴史を忘れてはならない。

多党派の脱原発や原発ゼロの言葉の氾濫を超え、独占資本を孤立させて脱原発の闘いを確かなものに発展させるには、集团的自衛権否定・憲法改悪阻止、原発再稼働中止・速やかな脱原発、反TPP、沖縄基地撤去等の中心となる左派諸政党が核心を担って、市民とともに共同戦線のテーブルを作ることが不可欠になっている。

教訓を生かして、参院選は比例区を「左派・みどり連合」というような共同の形で戦うべきだ。参院選ではそれぞれの党籍を持ったままで比例区に並ぶことができる。

都知事選の選挙公報を見て驚いた。宇都宮候補の欄で、「私たちも応援します」のなかに、大江健三郎さん等々の名前がない。生活者ネットワークや緑の党の名前はあが新社会党の名前がない。これではもっと広がるはずの宇都宮さんへの票を抑えてしまう。この場合は市民団体が主役としても、急な辞職・選挙に対するにわか仕立ての事務局の土台には、共同のテーブルが早くから作られておかねばならなかった。

日本に適合する社会主義を長期目標とする政党は、今は小さくとも、ある条件のもの

とで必ず大きくなる。脱原発も以前にはごく小さな声にすぎなかった。資本主義は必ず独占資本の思惑を超えて、収奪者を収奪する勢力をつくり出す。そのための旗を掲げて、直面する闘いで仲間を増やし自治体議員を作ることが不可欠である。(原野人)

## 労働者階級は八〇%超なのに

### ―第四六回総選挙結果から―

民主五七には驚いた。改憲勢力自民二九四、維新五四、みんな一八の三六六にも。

労働者を支持基盤とする共産・社民はそれぞれ八と二。投票率は第二次世界大戦後最低の五九・三二%のなかである。

『共産党宣言』はいう。

「われわれの時代、すなわちブルジョア階級の時代は、階級対立を単純にしたという特徴を持っている。全社会は、敵対する二大陣営、たがいに直接に対立する二大階級ブルジョア階級とプロレタリア階級に、だんだんとわかれていく」

ブルジョア階級は資本家階級―現代的では株式会社役員・経営者、プロレタリア階級は労働者を売る他に生活の手段を持たない労働者である。現代の階級構成はいかなるものか。この分析はわれわれの専売特許と思っていた。ちがった！ 独占資本の団体経団連はわれわれ以上に階級構成を重視する。

宮原耕治氏は世界最大の船会社・日本郵船会長で経団連副会長、労務政策の責任者だ。彼の講演レジメに「労働力人口の構成」。労働力人口六四九七万、就業者六二二二万、雇用人五四八八万、自営業者五四七万、家族従業者一六三万、それに完全失業者二七五万とある。われわれの分析と同じである。しかし、彼らは独占資本家層は約四万にはほかぶりだ。

独占資本は国税、労働者の剰余価値を政党助成金でばらまくことで政治献金を節約。その分、重点的に政治家を買収できる。現代政治の根本である。

国民は三年前の総選挙で自民党政権に引導をわたした。それからわずか三年と四ヶ月、国民は「民主はダメ」と自民党を復権させた。まるで年代物の柱時計の振り子が右に左に揺れるかのように。柱時計を日本とすれば、振り子は右に左に揺れるのではなく、右に右に振らされていく。

今回総選挙は右に揺れた大きな振り子・自民党をさらに右に誘導する二つの政党が、存在感を示した。日本政治はさらに右に振れる。

根本問題は資本が勘定台で差配する二つの保守党のいずれが勝ったかでなく、資本と対極にある労働者を基盤とする政党の影響力が失われつつある傾向を強めたことだ。現代社会は労働者階級とその家族が八〇%をはるかに超える。そして六五歳以上は人口の二五%。彼らは左派に与みする階級と階層だが、保守に奪われている。その分析と対策が左派の課題である。

都知事選結果はわれらが候補宇都宮さん九六・八万票。東京比例票は宇都宮さんを支持した共産四八・四万、未来四四・八万、社民一三・六万の一〇六・八万票。この差をどうみる。

## 「チェルノブイリ視察」から日本が見えた

― 脱原発 子ども達の未来をともし灯り ―

九月二十四日から十月一日までの、八日間の「チェルノブイリ視察ツアー」から戻り、新聞の「放射線物質情報」に一番に目を通すようになった。放射能に色があったら、怖さを実感し免れようとするのではなからうか。

先日の集まりでも現職の校長先生方が、「雨に当らない様にいくら注意しても子ども達は傘をさすのをめんどくさがって困るの。」と嘆いていた。特に、降り始めの雨は要注意！「放射能は恐ろしい」と口では言いながら、岩手は大丈夫と思っているような気がしてならない。

この度の「チェルノブイリ視察」で訪問した、「移住の権利をもつ第三種汚染区域」の学校二校で、調査した子どもの7割から8割が、ほぼ毎日が痛いと訴えていたのに驚いた。ウクライナ政府が「健康な子は6%」と報告書を出しているというから、決して多すぎる数字ではないのかも知れない。

帰国して新聞の「県内の放射線量」の値をみて更に衝撃を受けた。なんとその二校が、我が岩手県一関市、奥州市とほぼ同じ「放射線量」の学校だったことだ。

視察ツアーに同行した記者が「サンデー毎日」十月二十一日号に、「潜入ルポフクシマへの伝言 チェルノブイリの『最終警告』」を綴った。それを読んで欲しくて、「脱原発一千万人署名」に何十人もの署名を集めてくれた各地の友人たちには電話をし、市内の活動家にプレゼントした。

「メルトダウン」という言葉を世に知らしめ、放射能の恐怖に世界が震撼したチェルノブイリ原発事故から四半世紀余り、史上最悪の「負の遺産」を訪ねた徳丸威一郎記者は、「そこには二十五年後のフクシマ、そして日本の姿が浮かび上がった。」と書く。

私は、ウクライナの国立がん研究所、付属病院の小児科部門の見学と、二校の学校訪問から、二十五年後の日本の子ども達の、健康被害に苦しむ姿を見た思いがして身震いした。

### 小児ガンの生存率は五十五%

子どものガンが多い。しかも小児ガンの生存率は五十五%。ウクライナ保健省所属国立ガン研究所、小児科病院、院長グリゴリー・グリムシク医師に案内され、子ども達の遊戯室で話を聞く。

「毎年千人の小児ガン患者が発見されている。その半分は血液関係のガンであり、それ以外のガンの患者がガン研究所・小児科病院に来ている。その他とは、腎臓・脳などの臓器のガンのこと。」

この病院には、臓器に関わるガン患者が毎年二百五十人入院しており、五百五十床、小児病棟は四十床ある。

チェルノブイリとの関連や遺伝については答えづらい。調査がないソ連時代の九十年代初頭からデータを集積している。多くは骨のガンだ。」と話した。

日本からのお土産を渡そうと許可が出た二病室をのぞくと、治療で毛髪の抜け落ちた子ども達が、くぼんだ目で見つめる姿が痛々しかった。骨ガンや内臓の手術を繰り返している子もいた。

「家族の家」（ザポルーカ運営） 十人兄弟の長男で十六歳の少年は、田舎から出てきた父親と、「家族の家」に泊まって、仲間と楽しく遊んでいた。二・三日後に、足の腫瘍の手術をするという。

家族の家では、日本のひつつみと、餃子を合わせたような「ヴァレーニキ」（ウクライナ風餃子）をご馳走になった。ここは地方から出て来て治療をしなければならぬ家族にとって、大助かりの施設だ。

だが、五家族しか泊まらない上に、十二月で使用期限が切れ、立ち退きを迫られていると悩んでいた。これも、子どもの医療支援を行っている団体「ザポルーカ」の運営だった。

癌研究所とザポルーカ基金のスローガン『すべての子ども達は、将来を持つべきである』という精神に共感した。

小児がんの子供達のために国立がんセンターの小児病棟に、リハビリ室も作り病気を克服した子供達が「勝利者のスポーツ大会」で入賞し、大きな励みになっているのも「ザポルーカ」の支援のお陰だった。この団体に、「食品と暮らしの安全基金」読者からの寄付金の一部六〇〇〇ドルを、小若順一代表が今回も贈呈し、大いに感謝された。

ビシヤニツア村の学校を訪問 正装した子ども達が歌と語りで故郷の美しい自然と人々の豊かな心を表現し、やがて人類史上最も悲しい出来事に遭遇し、今も続く苦しみ訴えたのには、涙が止まらなかった。

少女は、「福島のことを聞いて悲しんでいます。」と話したので、「私は福島から三〇〇キロの所から来ました。」と、感動と感謝の言葉を述べた。帰り際に校長先生が、「一人風邪を引いたら、即、学校閉鎖にします。」と話された。抵抗力がないからだろうか。通訳さんの、学級閉鎖の間違いでは、と思いながら後ろ髪を引かれる思いで学校を後にした。

モジヤリ村の学校を訪問 玄関に、大きなパンに、刺繍された織物を巻いた大皿を捧げ持った少女と先生方が出迎えて下さった。「パンと塩で迎える」のが慣習なそうだ。先生方のウクライナ民謡の大合唱で送迎された。校長先生、副校長先生が女性で、明るく、さわやかで、というれしくなって一緒に写真を撮った。

郷土色たっぷりの昼食をご馳走になった後校舎を回った。廊下には、年度毎の優等生の名前が刺繍された、大版の掲示物もあった。一年生の教室には、昼寝用のベッドがあり、椅子には鶏の絵が描かれてあった。ベッドは四つか五つで足りるのかなあと考えたが、先生の数は子ども四人か五人に一人なそうだから、全員が一斉に昼寝ができるんだ。

## 深刻 放射能による健康被害

子どもの調査結果は、足のどこかが痛い（足首、ひざ下、筋肉、太もも）七十二％（六十二％）、頭痛八十一％（四十七％）、のどが痛い五十九％（三十六％）、だった。前者は、奥州市と同じ放射線量のモジャリ村の学校、カッコ内は一関市と同じ放射線量のピシャニツア村の学校の結果だ。

モジャリ村の家庭から持ち寄った、放射線量測定用の食品のうち、コケモモ、ミルク、チーズ、リンゴ、ライ麦から放射能が検出された。じゃがいも、人参、カラス麦、クルミからは検出されなかった。（オブルチ地区保健所放射能部門調べ）

放射能による健康被害は、原発から三十五キロの村から、事故から六年後、突然村民全員が強制移住させられたコバリン村でも、深刻な問題を抱えていた。元数学教師で校長だったミハイルさん自身は、九四年に心筋梗塞を患い、妻ガリーナさんは事故直後の八六年十二月に甲状腺手術を受け、以後何回も手術をしており、二回目の手術で取った腫瘍は、二・五キロもあったという。近日中に再手術の予定。繊維筋腫も患った。娘さんは婦人科が悪く、繊維筋腫。男孫と女孫も、甲状腺腫と診断されたと、分厚い眼鏡の奥で涙ぐむミハイルさんに胸が痛んだ。

辛かったのは健康被害だけではない。ミハイルさんによると、移住者はコバリン村の地元民から「（新住民は）我々の土地に住み着いた『チエルノブイリ人』だ」と差別を受けたという。ミハイルさんは「昔からの住民に、『これは我々の土地だ。これは我々の川だ。これは我々の魚だ。』とよく言われた」といい、静かに目を閉じた。

「ウクライナ人は『自分のへその緒が埋まっている土地が一番良い』と言います。私は生まれ故郷を捨てて移住するのが本当に嫌でした。」と、妻のガリーナさんは遠くをみつめた。今でも、あの時のご夫妻の張りつめた、悔しそうな表情が脳裏から離れない。

ミハイルさんのように、心筋梗塞など心臓に異常が出るのは、放射能は筋肉にも貯まるので、心臓の筋肉にも貯まるためだという。

また、甲状腺は脳に囲まれているので、甲状腺が脳に対して放射線の影響を与えることになるという。妊娠後最初の二週間に放射能を浴びたら胎児は生成しない。一番危ない脳の発達は、①八週目～十五週目②十六週目～二十一週目に何かあったら絶対問題がある。胎児が一番小さい時は一番危ない。言語分野は、妊娠期間に被曝したのが、二十六年経っても残っている。

被曝者の子は、神経関係、精神関係の病気をする。最も頻度が高い病気は、背中の痛み、自律神経異常。妊娠期間、〇～一歳被曝の病気は、自律ジストマ、精神異常である。（以上は、胎児の放射能被害を唯一、医師の奥様と共に研究してきたウクライナの医師、放射線医学研究センター ロゴノフスカヤ博士講演から）

学校訪問では話されなかったが、ここ十五年来子ども達の学力低下が大きな問題だと聞いていた。放射能は、脳を犯すから合点がいった。

視察に同行した、「サンデー毎日」の徳丸威一郎記者は、十月二十一号で、「二十六



年前の原発事故がもたらした悲劇は、今も続いていた。ウクライナの現実がフクシマの未来に重ならない保障はどこにもない。政府は改めてフクシマを直視すべきだ。」と書いていた。その政府が、突然に衆議院を解散だ。呆れてものが言えない。

### チェルノブイリ原発 二号炉運転室に入る

ウクライナの首都キエフは、成田からモスクワ経由のアエロフロート機で約十六時間。チェルノブイリ原発に入るには、ベラルーシ国境近くの北部まで広大なヨーロッパの穀倉地帯をバスで四時間。原発から三十キロ圏の居住禁止区域に入らなければならなかった。

原発から三〇キロ、十キロの二カ所の検問所は警察、軍当局による厳重警戒が敷かれ、パスポートを見せて、ウクライナ政府の許可がなければ排除される。妊娠中の女性や十八歳未満は立ち入り禁止だった。

バスの窓から見えるのは、点在する原発作業員の宿舎や村人達の廃屋、放射能で枯れた松（赤もり）など。汚染された木造家屋は火災で放射能が飛び散るのを恐れて、解体されて地中に埋められ、こんもりとした丘になっていた。狭い日本では考えられないことだが。現在も、山火事が起きないよう大勢の消防士が見張りを続けているそう。

最初に見学した、二号炉運転室に入った外国人は、私達が初めてということだった。この二号炉で、緊急処理に当たった四人のうちの一人で、二号炉の火を止めるスイッチを切ったスーパリエリート、チェルノブイリ連盟代表アンドレーエフ氏の講演は説得力があった。

放射能を閉じ込める石棺を、チェルノブイリでは、六ヶ月経って作ったが、福島は事故のままで。一日も早く石棺を被せるようにしなければならない。チェルノブイリでは今の石棺から雨漏りするので、百年もつ大がかりな石棺作りに取り掛かっている。アンドレーエフ氏は、日本に応援に行こうと日本政府に申し込んだが断られたと残念がっていた。

### 核物質を取り除ける方法なんてない

福島の場合は、ウランよりもプルトニウムの方が危ない。福島原発はプルトニウムが燃料。チェルノブイリは放出された混合物の量が小さく、液体排泄され池の方に数トンの水を流した。福島は数百万トンの水を出していく。福島の原子炉はアメリカ製で燃料の上の方に爆発があった。数十から数百kgのプルトニウムが、空气中に放出された。九〇％は風向きで海に行った。（それで三陸の魚が食べられなくなったんだ。）

アンドレーエフ氏は、「核物質を取り除ける方法なんてない。四号炉の爆発で閉じ込められた一人が今も残り残されたままだ。こんな深刻な事故があっても、誰も勉強していない。原子力の一番お金がかかるのは安全性です。」と、きっぱり話された。

「安全が確保されない、原発の再稼働は許してはいけない」と、私は思った。

四号炉の爆発は、「冷却水が多すぎたので蒸気が入るスペースがあまり無かった。蒸気がタービンに行くことが出来ず、爆発が起こった。」と聞いて、事故は簡単に起



きるとますます怖くなった。原子炉を冷やし続けるための用水路二百二十一平方kmの冷却港に棲む、優に二倍はある巨大お化けナマズの不気味さが、原発の恐ろしさを象徴しているように思えた。

さて、ウクライナ首都キエフは、歴史的な風情豊かな街並みで、人口三百万の大都市だった。二泊した「ルーシホテル」は、優雅で食事也大満足だった。

### チェルノブイリから閉鎖的な日本が見えた

チェルノブイリ連盟のスタッフ・家族（全員が被曝者）の懇親会で、挨拶に感動した事務局の女性二人に、岩手のスカーフをプレゼントした。喜んでくれてすぐ肩にかけて食事をしていた。帰り際に写真を撮ろうと並んだところ、私の薬指にすつと指輪をしてくれた。後でみてびっくり。素敵なダイヤの指輪だった。思い出に残る宝物を頂いた。

この度の、福島と同じ「レベル7」の「チェルノブイリ視察ツアー」は、一見の重要さを実感できた、感謝と衝撃の旅だった。二度も現地に赴かれて綿密な連携をとられた小若代表のお陰で、どこでも大歓迎を受けた。小児がんの子ども達と、その家族や研究を支援し、学校や地域の取り組み等から発展した今後の運動が、チェルノブイリと福島、そして日本の子ども達を守るための、「子ども達の未来にあかりを灯す」運動であることを実感した旅だった。

非汚染地域に七十日間行って保養と療養を続けた二十六歳の女性ナタリアさんが、心臓と手足の痛みがなくなり、心臓病のニトログリセリンも不要になって、「来年結婚します。」と明るく健康になった姿が、あかりを証明してくれた。

四十年続く「合成洗剤追放運動」や、平和を守る運動等、「子ども達の未来にどんなあかりを灯してやるか」が大人の責任、親や教師の責任だと思って生きてきた私にとって、大満足の旅であった。

セシウム<sup>134</sup>は半減期が二年だが、セシウム<sup>137</sup>は半減期が三十年だからなかなか排出しない。だから新聞の「放射性物質情報」で、例えば基準値以下の食品であっても、「ちりも積もれば山となる」と心得て、出来るだけ摂らないように、子供のいる家庭や、若い世代に、チェルノブイリの様子も話していこうと思う。

チェルノブイリから閉鎖的な日本が見えた。チェルノブイリでは事故八日後に外国人記者を現場に入れたのに対して、日本は国内記者でさえ八ヶ月後。日本政府がウクライナの技術者や医師の来日希望を無視したこと。放射能が住民の健康に与える影響について情報提供しようとした、ウクライナ国立放射線医学研究センター所長の支援を受ければ良かったのに。

### 豊かな三陸の海を再び

三十代半ばから豊かな漁場の三陸の海を守る運動を続けて四十年になる。「合成洗剤は生物の蛋白質を溶かし、発がん性がある」と解って、子ども達のために放っておけなくなった私は、乞われるままに県内外各地で講演した回数は数え切れない。震災直前の三月六日も釜石の「平田地域会議きれいな海を守る運動」で講演後、いつもの

ように、参加者全員にアクリル毛糸たわしを配った。

津波でなくなられた多くの方々の鎮魂の思いを込めて、豊かな三陸の海を守りたい。せめて合成洗剤を海に流さないようにと、指編みの「アクリル毛糸たわし作り」の講習を始めた。「学級通信の『わかめ』『わかば』を流してしまったのが悔しいです。」と語った、初任校での教え子「心象舎」藤枝宏君の、「二十二年カレンダー『甕れ三陸』ふたたび会いたい、あの海、あの空」の風景を夢見て。

(照井 モト 岩手県釜石市)

## 私のなかの“釜鶴松” “渡嘉敷良子” に出会うために

### 1、六十三歳になってしまった

今朝、歌舞伎俳優の中村勘三郎さんが亡くなった。食道ガン、五十七歳という若さ。ぼく自身は歌舞伎とはまったく縁がないのだが、つい先週、同じ食道ガンから復帰した“くわっちよ（桑田佳祐さん）”のライブに福岡まで行ってきたばかりなのだ。ライブの方は“頑張りすぎないでよー”と思うぐらいのステージで超感動だったけれど、勘三郎さんとは同じ食道ガンつながり、しかも同年齢ということでお互いに励まし合っていたというから、“くわっちよ、やっぱり落ち込んでるだろうなー”なんて考えてしまった。そういえば、今回のライブのはじまりとラストは、歌舞伎調の口上だったなー。

そして、ぼくはなんとライブ当日が六十三歳の誕生日だったのだ。誕生日なんて結婚してからは家族だけの行事だったけれど、親しい学生の仲間たちには誕生日の会までやってもらった。ちょうど誕生日が近いカミさんも来沖中で、夫婦で楽しいひとときを演出してもらった。

それでもねー、同じ学生を名乗っていても二十歳前後の皆さんとぼくとは、やっぱり残された時間の差は歴然としている。五十七歳の勘三郎さんから考えたら、ぼくはもう“おまけの人生”そのものだ。

二年間の予定の沖縄生活も残りが少なくなってきた、そろそろまとめのことも考えないといけない。これまで書いてきたこととダブる部分もあるけれど、メモしてみることにする。

### 2、“生き方”としての戦後民主主義の再生

沖縄「留学」を考えたそもそものは、かつこよくいえば、戦後民主主義再生の課題を沖縄近現代史の経験の中から学び直したいということだった。それも、個人史という“小さな物語”―ひとりの人間の人生や生き方という視点から、“大きな物語”を考えることを心がけてきた。

#### ① 一人ひとりの人生として記憶する―栗原淑江さんと被爆者の「自分史」

あたりまえのようにして受け入れてきたことが、少しちがうのではないか、と考えるはじめたのは、すでに戦後五十年を迎えようとする頃からだったろうか。いわゆる戦

後民主主義といわれた法体系や社会運動が、いとも簡単に解体させられ自壊もしていた。

アジア・太平洋戦争の体験、それは間違いなく憲法九条を中心とした戦後民主主義の原体験をなしている。その戦争体験の継承について、あらためて考える契機となったのは、被爆者の「自分史」に触れたことが大きかった。被爆者が「自分史」を書く活動を呼びかけ支えてきた栗原淑恵さんは、次のように書いている。

「被爆者の『自分史』には、人生への夢を抱き、仕事をもって働き、恋をし、結婚・子育て、そして孫の成長に目を細める、普通の生活者としての人生が描かれる。被爆後の五十年は、私たちの生きてきた五十年でもある。そんな私たちと等身大の、同時代を生きる一人の人間としての人生が描かれるなかでこそ、その人生に通奏低音のようにつきまとい、くり返し頭をもたげてくる〈原爆〉の実像が浮き彫りにされ、それぞれにとつての〈原爆〉が何であつたのかを確かめることができるように思う」『被爆者たちの戦後五十年』岩波ブックレット、一九九五年、五十一～五十一頁

屋嘉比収さんも、『沖縄戦の当事者性を獲得していく』ための視点の一つとして、「沖縄戦や米軍占領下という〈大きな物語〉に対して、家族史や個人史的な視点という〈小さな物語〉から考えてみる」『沖縄戦、米占領史を学びなおす』世織書房、二〇〇九年）ことの意義を強調している。

② 苦痛と出会うということ―鄭(チョン)柚(ユ)鎮(ジン)さんと駐韓米軍犯罪被害者遺族

もうひとつ、戦争体験を証言し記憶することの意味について考えさせられた一文がある。初めて訪ねた沖縄に打ちのめされるようにしていた時、季刊『けーし風』で読んだ鄭柚鎮さんの「苦痛と出会うということ」である。駐韓米兵によって息子を殺された母親の活動に寄り添い支えるなかで得たものを、次のように総括している。

「彼女(母親)の証言は、悲しみと苦痛をともに分かち合ってほしい、という訴えだ。彼女はそれを通して、破壊された『人間性に対する信頼』を回復しようとし、この世の中を信じて生きようとしている。そして、心の中の深い傷を、息子への恋しさを、それによって克服したいのだ。

こんな切実な願いを、『米軍撤収や祖国統一』という韓国社会の運動の課題に単純に還元するのは正しくない。…

ただ一度でも、彼らの苦痛に触れてみようとする努力、彼らの叫びが、自分と同じく生きている人間が表している感情だと感じようと努力することが、平和を実践する第一歩ではないだろうか」『苦痛と出会うということ』―季刊『けーし風』(三十一号・二〇〇一年六月所収、十三頁)

沖縄戦の証言に触れるようになってから、体験者の多くが二十年、三十年、人によっては五十年余を経てはじめて証言するケースのあることを知った。その沈黙の歳月の長ささと重さに思いを寄せることもなかった自分が、心底情けなかった。体験者にとって証言活動とは、破壊された自らの人間性を回復し、生きることの希望を取り戻していく過程そのものなのだ。鄭柚鎮さんは、そのことに気づかせてくれた。

③『苦海浄土―わが水俣病』―石牟礼道子さんと釜鶴松さん

初めての「水俣展」が東京で行われたとき、最終ブースに掲げられたおびただしい数の患者さんたちの遺影に圧倒された。そして、すぐに手にしたのが『苦海浄土―わが水俣病』だった。

水俣病には原因となる企業とそれを放置した経済・政治の構造があり、それとの日までも及ぶ長い闘いの歴史がある。その告発の支えとなった一人が、『苦海浄土』を著した石牟礼道子さんである。そして、次に掲げる石牟礼道子さんと老漁師・釜鶴松さんとの偶然の出会いなしには、『苦海浄土』が書かれることもなかったかもしれない、そんなことを思う。そこに一人の人間の営為のもつ力、希望としての個の存在を考えたい。

以下は、『苦海浄土』から、ふたりの出会いの部分。

「安らかにねむって下さい、などという言葉は、しばしば、生者たちの欺瞞のために使われる。

このとき釜鶴松の死につつあったまなざしは、まさに魂魄この世にとどまり、決して安らかになど往生しきれぬまなざしであつたのである。

そのときまでわたくしは水俣川の下流のほとりに住みついているただの貧しい一主婦であり、安南、ジャワや唐、天竺をおもう詩を天にむけてつぶやき、同じ天にむけて泡を吹いてあそぶちいさなちいさな蟹たちを相手に、不知火海の干潟を眺め暮らしていれば、いささか気が重い、この国の女性年齢に従い七、八〇年の生涯を終わることができると考えていた。

この日はことにわたくしは自分が人間であることの嫌悪感に、耐えがたかった。釜鶴松のかなしげな山羊のような、魚のような瞳と流木じみた姿態と、決して往生できない魂魄は、この日から全部わたくしの中に移り住んだ」(『苦海浄土』講談社、一九六九年、文庫版一二五―一二六頁)

④「ひめゆり」の沖縄戦―仲宗根政善さんと渡嘉敷良子さん

一九九九年、初めて沖縄の地に立ち「ひめゆり祈念資料館」を訪ねた私は、第4展示室を埋めた少女たちの遺影に、「水俣展」最終ブースの釜鶴松さんから患者さんたちの遺影を重ねながら見学していた。

そして、石牟礼道子さんにとつての釜鶴松さんの存在と同様に、仲宗根政善さんにとつての渡嘉敷良子さんの存在を知ったのは、『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』を読んだつい最近のことである。「まえがき」には、仲宗根政善さんの次のことばがある。

「洞窟に残した重傷の生徒たちのことを思うと、この記録は私にとつては懺悔録でもある」(『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川書店、一九八〇年・文庫版四頁) 沖縄戦の終結から数ヶ月、収容所を転々としていた仲宗根政善さんは、ある日「壕にほうり捨てて去った」教え子・渡嘉敷良子が宜野座病院に収容されていることを聞く。以下、彼女との再会にふれた部分。

「壕にほつておいた渡嘉敷良子が、白い毛布をかけられて、寝台に寝かされていた。

…

『……すまなかった……』

やっとこれだけいえた。…やせこけた身体にか細く残っている命が、やがて天上のものであることを直感した。…私の苦悩に感づいたのか、

『先生ありがとうございました』

とのどにかかるようにして、けいれんしている唇からかすかな声が出た。

私は仏の光にふれたような気がした。罪深き身が許されるような気がした。生きる苦しみがいかに苦しかろうと甘んじて受けようと思い続けながら、…道々私はこう思った。

敵として恨んだ米兵が、かえって教えを説いた先生よりも親切であった。渡嘉敷からしてみれば、壕にほり捨てて去った先生や学友よりは、救ってくれた米兵の方がありがたかったに違いない。…あの場合はいかなったと、いくらいいわけをしてみても、それはいいわけにはならない。…日本国家全体が犯した罪が、具体的には自分を通じてあらわれたのである。…自己とは決してそう小さいものではない。その根は深く過去にも根ざし、広く社会にもひろがっているのである。…私は業悪ということをつくづくと考えさせられ、身の罪深きにおののいた（同・文庫版一六五―七頁）

教え子・渡嘉敷良子さんを、このように見つめることのできた仲宗根政善さんの存在によって、ひめゆり学徒隊をめぐる沖縄戦の実相は早い時期に明らかにされ、「ひめゆり祈念資料館」の先駆的活動へと結実していくことになる。こんど同館を訪ねる際は、まっ先に第4展示室に渡嘉敷良子さんの遺影をさがすことにしたい。

##### ⑤ 「集団自決」を生き延びて―金城重明さんと小嶺正雄さん

今年三月と六月、渡嘉敷島に小嶺正雄さんを訪ね、当時の「集団自決」体験も含め、少しまとまった話を聞くことができた。

持っていた手榴弾が不発だった小嶺正雄さんらの家族と親族は、「集団自決」の現場を生き延びることになる。一方で、手榴弾を持たなかった阿波連部落（小嶺正雄さんとは別の集落）の住民たちは、木の枝や農具、ヒモやカミソリなど武器でないものが「確実な武器」となって、多くのいのちを失うことになる。

「集団自決」から生き残った住民たちは、北（にし）山の日本軍陣地をめざした。小嶺正雄少年は、そこで金城重明少年を見かけている。

「阿波連の連中は、家族や親族を殺したことを後悔してるんですよ。『早まったことをした』と。（玉砕したと思っていた）日本軍がこれだけ生きているのを見て、『早まったことをした』とね。（金城）重明さんとかね、『これだけ生きているのに、殺すんじゃないかって言ってる。立ち泣きして、涙を流して謝っているんですよ』

（小嶺正雄さんの証言 二〇二一・六・三）

小嶺正雄さんは、証言のなかで一度も「集団自決」のことばは使わなかった。「恐ろしいこと」と表現した。そして、最後の方で、こんなことを話した。

「つらかったんですよ。この前（今年の渡嘉敷村慰霊祭で）、ようやくキリ短（注）の金城（重明）さんと話したから、もう気が晴れてる。本当に、あれはもう、悲しく

て…」

二人の間で、どのような会話が交わされたのか。次回訪ねるときは聞いてみたいと思う。

同じ渡嘉敷村慰霊祭に参列していた目取真俊さんは、その時の金城重明さんとの会話の断片を、自身のブログに次のように書き込んでいる。

「沖縄戦は『軍民共生共死』だと言われるが、渡嘉敷島では『軍生民死』だった。軍は組織的に生き延び、民は死んでいった」（目取真俊『海鳴りの島から』

<http://blog.goo.ne.jp/awamori777> 二〇一二年三月二十九日）

（注）キリスト教短期大学の略。現在はキリスト教学院大学。金城重明さんは短大時代に学長を務めた。

### 3、私のなかの“釜鶴松”“渡嘉敷良子”に出会うために

二〇一二年一二月、いよいよオスプレイの本格訓練が沖縄・「本土」ではじまり、米兵の暴虐はとどまるところを知らない。一方で、ぼくにとつてオスプレイにゆれたこの数ヶ月は、それでもなお心を折らず、何よりもいのちを大切にする沖縄をめざして献身する、無数の『希望としての個』との出会いであつたことを思う。

そして、学びとは何か、についてあらためて考える。それは、私にとつての『釜鶴松』を『渡嘉敷良子』を、自分史のなかに発見し思想化していく作業なのではないか。残る沖縄生活が、そこに一步でも近づくものであつてほしいことを願っている。

（毛利孝雄・沖縄大学四年）

## ◇ 編集部だより ◇

▽『通信』は三十七年めへ。一人の編集子の冊子が、こんなに続けられたのは読者諸氏の激励のおかげ。編集子は一九四五年生まれ。ある仲間の交流紙に「理論と確信を」とこんな趣旨の稿を。

▽今もつとも勉強している仲間が、貴方たち。私に加えてもらつてからも『共産党宣言』、『資金・価格および利潤』、『空想から科学への社会主義の発展』今は向坂塾「資本論研究会」の学友神津朝夫著『知っておきたいマルクス「資本論」』読了間近。次回はなにを選ぶでしょうか。

勉強会は月一回、午後六時から九時までの三時間。内容がまたすごい。まず輪読、ついで報告者、さらに中心メンバーが核心を述べ、自由論議へ。まさに勉強、勉強の三時間。一九六〇年代からの国労の発展期、こんな勉強が全国いたるところ、毎日のようにおこなわれておりました。こんな勉強の集積が、世界労働運動史上例のない二十三年もの国鉄闘争をたたかいぬく力に。

労働組合は資本の搾取強化への反作用、つまり資本にたいする労働者のたたかいの組織としてはじめは自然成長的に、そして社会主義政党結成とともに自覚的につくられた。労働組合は、このように生まれながらに『社会的』であるばかりか、教育・文化、思想、政治的存在なのですね。

押さえないければならないのは、労働組合は賃金制度が存在しているあいだは、資本に対する労働者の闘争は存在しつづけるということ。「だらしない」と思っている民間大企業労働組合の組合員、労働者ですら「やっぱり労働組合は必要だ」と考える者が大多数であることは、現在の社会が主として相敵対する二大階級に分裂しているという事実を、本能的にかぎとつているからです。労働組合強化には、まずこの原則、そして狼のような資本家とその手先の狐のような組合幹部によって、羊にされているかのような労働者は成長し、狼や狐を包囲・せん滅する時代はかならずくる、その条件を資本がつくることに確信を持つこと。

資本主義が変わったわけではありません。本屋には資本主義の悪口を書いた本、それと比例して『資本論』解説が目立つようになりました。

▽初心忘れずがんばりたい。

## もつと幅広く幟、ゼッケンをもつて

### ―運動の広がりと推進派の虚言―

脱原発に向けて、東京に端を発した金曜日夜の集会・デモが全国各地に燎原の火の如く拡がった。その規模、数を私は知らない。集まった人々は思い思いに訴え、叫び、主張したそれを野田総理は「大きな音」と表現したと云う、呆れた鈍感さだ。

私も一度だけだが北海道庁北門前の集会に参加した。

集まって来た人々は、ゼッケンを胸に手にはプラカード、笛、太鼓、ラッパ、中にはフライパンを持っている。幼児の手を引いて来た若い母親も目立った。私がかつて体験したデモとは全くその様相を異にしていた。いやその賑やかなこと。

労働運動が目覆うばかりに衰退して、ストライキどころかデモ、否集会すらもやらなくなった昨今、ようやく大衆が立ち上がったというよるこびが湧き上がるのを禁じ得なかった。もつとも自然発生的に幅広い民衆が集うというのは珍しいことでもあり、それだけ原発事故への怒り、再稼働ストップの思いが強いということでもある。

ところが二時間は経過した集会も終わりに近づいた頃、主催者側と思しき人がマイクを通じて次の集会の呼びかけをはじめた、その中で気になったのは「お集まりの際には、所属団体や労働組合名などの入った幟、ゼッケン等を持ちこまないように」という趣旨のものだった。

真に脱原発を目指すための行動ならば、誰であろうとグループであろうと規制する必要があるのだろうか。このような動きは護憲の会やその集会にも見られるが、これら一連の活動のエネルギーを削ぐことにあるのではないか。

また今年の3・2以降数多くの原発に関する書物が出版されているが何も反原発の本ばかりではなく、推進派の提灯持ちと思われるものや、電機事業連合会のように広報紙で巧みに宣伝しているものもある。

特に前者の本の副島隆彦なる人物はその書の中で、武田邦彦、小出裕章、広瀬隆、児玉龍彦の四氏を「放射能恐怖扇動の悪質な四人組」と名指し、「いずれ大きな責任を取ってもらおう」と言い切っている。

また電機事業連合会はE n e r g 特別号で「私たちは「原子力発電は引き続き重要な電源として活用していく必要がある」と考えます」とし、原子力ゼロを目指す場合の主な課題として次の七点を挙げている。

- 一、安定したエネルギー資源の確保が困難。
- 二、国富の流失、電気料金の上昇など経済や暮らしに甚大な影響を与える。
- 三、地球温暖化対策に逆行する。
- 四、太陽光・風力発電の大量導入には課題大。
- 五、人材確保・技術継承が困難になり、原子力の安全管理に支障をきたす。
- 六、原子力政策を協調しながら進めてきた各国との関係を損なう。
- 七、何よりもご協力頂いてきた地域の皆さまの信頼を失うと並べたてている。



何れを見ても素人の我々が反論できるものであり、言葉を換えれば消費者を脅迫しているともとれるのではないか。

事故以来、私にも全道各地から講演依頼があり、快く応じて出かけて、自らの反原発のたたかいの歴史を話してはいるが、道議会等で指摘し、議論して来たことがかくも見事なまでに的中してしまったことを手放しで喜ぶことはできない。それは余りにも被曝され、被害を受けた方々が多いから、そして今後の対策の重大さを考えると気が遠くなってしまうからである。

今私が何よりも大切にし、頼りにしている教科書がある。それは私が最も畏敬してやまない原野人氏の著書『確かな脱原発への道』である。彼とは社会党時代、社会党の原発政策が危うくなつて来た時から「原対協」を組織してたたかった同志であり、ヨーロッパ各先進国の原発視察をし、我が国の原子力政策に警笛を鳴らし続けてきた間柄である。

これからも私の「座右の書」として活用させて頂くつもりである。（渋谷 澄夫）

空　　よ

お　　い　　空　　よ

紺碧の　　空　　よ

すばらしい紅葉が見えるか　　褪せてないか

地球は　　くすんでないか

ゲンパツの煙は　　どうか  
放射能に　　むせんでないか

雨を降らせても消えない程

地球は汚されたよ

せめて　　雪は　　まっ白なのを……

セシウム入りは　　いないよ

こころ洗われる　　きれいな雪だよ

オロオロ歩くひとびとを救っておくれ

ついでに

汚れた政治も　　洗っておくれ

ふざけた政治も　　叱っておくれ

すみお

「中間層」という虚構

——現代労働情勢と運動の課題（中）——

「中間層」正しい定義　厚労省『労働経済の分析』（いわゆる「労働白書」）は「分厚い中間層を」、それには「消費拡大」とドラ声張り上げる、「これこそデフレ克服への万能」とでもいうように。立ち止まり考えなければならぬことは、「中間層とはなにか」、「賃金への闘い」である。もともとの「中間層」とは資本（資本家）・労働（労

働者）・土地(地主)の三つの階級の間にある階級・階層、つまり小農漁民、小商工業主、医師・弁護士・物書き・芸術家等インテリゲンツィアである。これら中間層は資本の蓄積・集積・集中の運動で労働者階級に転化してしまった。歴史的にはこうである。

第一(一九五〇～六〇年代)、石炭から石油へのエネルギー革命は、産業構造を大きく変え、北海道、九州等の産炭地を荒野に変えた。

第二(一九六〇～七〇年代)、高度成長は太平洋ベルト地帯、瀬戸内海沿岸を大工業地帯とした。景気循環そして競争は工場の統廃合をもたらし、一九七〇年代の鉄鋼・造船不況は北海道、九州から本州へと難民(首切られた労働者)移動となった。

第三(一九七〇から一九八〇年代)、資本は政府に農業自由化、大店法、消費税増税を要求、この政策が実行された。農民は農協、小商工業主は大流通資本に飲み込まれ姿を消した。

第四、この同じ時期、急速に成長したのは病院、学校、監査・法律の諸法人。専門知識を生産手段とした医師、教師、弁護士、公認会計士等々が労働者階級に転落した。

第五(一九八〇～九〇年代)、国営企業(国鉄、電々、全専売)民営化は、町や村を丸ごと消した。とくに、国鉄民営化がそうである。

第六(一九九〇～二〇〇〇年代)、平成の大合併は地域を粉碎してしまった。

こうして、「中間層」とされた中間階級は資本に収奪されるばかりか、政府の対策で、農・漁民、小商工業主はわずか数百万にされた。「中間層」の、これが実態である。政府が呼号する「中間層」とは、したがって労働力を売る以外に生活の術をもたないものとなる。

「中間層」と資本主義 「分厚い中間層」、「中間層」と政府がいう労働者は資本主義社会と共存し、安定するか。否!である。その本質はマルクスがとつくの昔の解明した。『資本論』第二四章いわゆる本源的蓄積の第七節資本主義的蓄積の歴史的傾向で、労働者階級と資本主義的生産様式の歴史性をこう結論づける。

「労働者がプロレタリアに、その労働諸条件が資本に転化されれば、資本主義的生産様式が自己の足で立つにいたれば、労働のさらにそれ以上の社会化と、土地その他の生産手段の、社会的に利用される、したがって、共同的な生産手段への、さらにそれ以上の転化、したがって、私有者のさらにそれ以上の収奪は、一つの新たな形態をとる。いまや収奪されるべきものは、もはや自営的な労働者ではなく、多くの労働者を搾取しつつある資本家である。

この収奪は、資本主義的生産自体の内在的法則の作用によって、資本の集中によって、実現される。つねに一人の資本家が多くの資本家を滅ぼす。この集中とならんで、すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪とならんで、ますます大規模となる労働過程の協業的形態、科学の意識的技術的応用、土地の計画的利用、共同的にのみ使用されうる労働手段への労働手段の転化、結合された社会的労働の生産手段として使用されることによるあらゆる生産手段の節約、世界市場網への世界各国の組み入れ、およびそれとともに資本主義体制の国際的性格が、発展する。この転形過程のあらゆる利益を横領し、独占する大資本家の数の不断的減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が、増大するのであるが、また、絶えず膨脹しつつ、資本主義的生産過程そのものの機構によって、訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も、増大する。資本独占は、それとともに、かつそれのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、これらの資本主義的外被とは、調和しえなくなる一点に到達する。外被は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。

(注)ここに「度」という言葉は、窮乏化の質的な発展(餓死をも意味する)と同時に量的な発展(貧乏人の数が増す)と、二つの要素を同時に意味するものと解する。それがそのまま現われないのは、労働者階級の抵抗によるのである。……訳者。

具体的にはこうである。①資本主義的合理化、生産力の発展による科学技術革命は不変資本(固定資本)を著しく肥大化し、可変資本(労働力)をすくなくする、②この結果、産業予備軍、幾層にもわたる不安定雇用労働者、半失業者、失業者が資本蓄積のなかでつくられる、③資本からの労働者需要は減り、労働者の供給は相対的にも絶対的にも大きくなる、④労働者間の職を求める競争は激しく、「安売り」となり、労働者間の格差は大きくなる、⑤労働組合は資本のしつぽとなる傾向を強めているから、労働条件、雇用は悪化する、⑥資本による生産性向上は人減らし(賃金コスト削減)を目的としておこなわれるから、要員は減らされる、⑦要員不足は労働強化につながり、強権的労務管理は精神疾患をふやし職場の荒廃をもたらし、ついには労働者を離職、自殺へと追い込んでいく。(つづく)

## ◇ 読者からのおたより ◇

うらやましい 師走に入り、総選挙・都知事選挙も最後の次期、お多忙のことと思います。先日は『確かな脱原発への道』をご送付いただきましてありがとうございます。ここからお礼申し上げます。釧路でもたくさん仲間が知恵を出し合い、微力ですが脱原発の声を上げ続けています。二冊送ってください。代金は同封しました。同封の品は、北海道・中標津町で作っている「標津羊羹」です。活動の疲れをとる一服の時にでもご賞味ください。都知事選では、恵まれた候補者で闘われていることを羨ましく思います。勝利を期待しております。(釧路・K)

編集部より 標津羊羹おいしくいただきました。都知事選候補者の宇都宮さん大奮闘です。原発銀座 いつもお世話になってます。『確かな脱原発への道』購入申し込みです。十八冊お願いします。まなぶ、月刊労働組合、社会通信等購読者の皆さんに、ぜひ読んでほしい。我が京都北部(福知山、綾部、舞鶴)地域は「原発銀座」福井県の直ぐそばです。各人がどのように感じているか、なかなか話す機会はないのですが、その本質を学習してもらえばと思います。(京都・T)

編集部より 原さん喜ばれると思いますよ。感想そして活動寄せて。支持率が二〇％程度で 各選挙候補者、特に民主党候補のビラや訴えにはあきれ果て、嘘ばかり。民主党推薦候補が、T P P 反対? 消費税凍結? 自民党候補のパンフレットは全く中身がなく肝心なことには一切ふれていない。原発のゲの字もない。不利になるから一切触れないようにしているんだろ。選挙は自民党が勝つとは思いつつ、支持率が二〇％程度で、日本列島が全部自民党になったとはいやですね。おまけに変な奴ら(維新)がくっついて、憲法改正ですかね。(稚内・O)

編集部より 労働者階級が九〇％ちかいの。労働者の党が前進しないのはなぜか。やめられない ややこしい状況の中、いつもの確な情報・分析がありとうございます。他は何も読んでませんが、社会通信だけは止められません。引き続きよろしく願います。誌代と共に原さんの「確かな脱原発への道」代金を送るうと思うのですが、誌代は幾らですか。(京都・M)

編集部より 嬉しいお便りに感謝です。がんばります。

市議選たかかう 毎週、「脱原発」や「人間らしく生きたい、格差・貧困をなくせ」をアピールするのぼりを持つての4駅アピールランが一〇〇回に近づいてきました。また金曜日は阪急茨木市駅東口で「原発再稼働反対、全ての原発ゼロに」の訴えを楽しく続けています。さて突然ともいえる党首会談での解散宣言から、街は総選挙に向けて騒然としてきました。マスコミは第三極だと維新を持ち上げ、保守三党体制に誘導しています。しかし民主党が第二自民党であり、維新が自民党や民主党から抜け出した議員の受け皿であることは歴然。三党とも消費税増税、原発推進、憲法改悪、T P P 推進など悪政推進トリオです。公明党候補の選挙区には自民も維新も候補者を立てないなど実際は四党の談合体制。誰がバッジをつけるか仲間内の争い、どうやらの保守政党も理念なき野心家の烏合の衆になってきたようです。それでも「いのちが大事、くらしが大切」勢力の大同団結に向けて希望をもつて総選挙と来春の市議選を闘います。(大阪府茨木市・山下 けいき)